

現代世界における人種主義の行方

1. はじめに

- ・人種という概念、人種差別に反対するという発想は口で言うのは簡単。だが、その実際は非常に根深いもの。

⇒大学の制度などにも巧みに結び付いている。

では、どのように状況を変えていけるのか。

- ・人種 **race** という言葉を今日、大学や教科書で習うことはほとんどない。

しかし、70年代、京大教養部では人種学という授業があった。

{ 人種→生物学的区分 ニグロ、モンゴロイド、コーカソイドというような分類
骨格や肌の色素がその区分の基準に。
民族→文化的区分

⇒このような図式が常識としてあった。

- ・形質人類学→鼻の幅や頭がい骨の計測

北海道大学

⇒アイヌ人類学の学術研究のためアイヌ人骨を収集し、保持してきた。

明治末ごろに、アイヌの人びとがどのような人種に属するのかを調べていた。

↓

平成9年にアイヌ新法ができるまで、明治32年に制定された北海道旧土人保護法というひどい名前をもつ法律で規制されてきた。そして今年6月に日本政府はアイヌの人々をはじめて先住民として認める決議を採択した。

⇒人種という言葉はポリティカル

2. 人種の解体

- ・社会的・人為的差異のカテゴリー

人種というものは科学的には存在しないコンセプト、なぜか？

⇒社会的に作られたものであるから。人為的な力が働いた人間区分。

人間の遺伝子の数は数万個で、髪の毛や肌の色を決めるのは、そのうちのほんのわずかな遺伝子。→肌の色を選ぶ必然的な根拠はない。

・ハイブリッド化とクレオール化

*南アフリカのアパルトヘイト

法律で決められた人種差別

背徳法⇒異人種間で性行為をすることは禁じられていた。

子どもができた場合：見た目が黒人、カラード（混血）→問題がない。

見た目が白人→困る 見た目が白人で両親に黒人がいる
という状態 肌の色で差別するアパルト
ヘイトの論理に反する

*日本人と結婚する在日3世の人びと

日本人なのか、朝鮮人なのか？

⇒ハイブリッド（異種混交）

ピュアな黒人、白人というものが成立しなくなる。

*人間は交配して、どんどんハイブリッド化していくために、人種というものは科学的に意味をなさない。だから人種差別は社会的に機能しているものだといえる。

E.g.. アフリカに出自をもつ米国大統領候補オバマ氏

3. 人種のリアリティ

・人種という言葉はないという立場

⇒「私たち〇〇人」という意識（identity）にもとづいた同じ人種同志の連帯や共同がないということ。すなわち、エッセンスとしての人種が解体され、社会的に作られた言葉というならば、それぞれの社会的な立場や状況が違うなかで連帯は難しい。

・関連事例：最近の様々なセクシュアリティのあり方

	男	女	半陰陽
性的器官	+	-	+
性的オリエンテーション	+	-	+
性的プレゼンテーション	+	-	+
性的アイデンティティ	+	-	+

*フェミニズムは虐げられてきた女としての立場、つまり女というアイデンティティをもとにして連帯してきた。しかし、今日のように女であることの多様性が認識されるようになると、連帯が難しくなり、戦えない

⇒フェミニズムのジレンマ

女であるということを前提とすると、性で区別してしまうというジレンマに陥る。同じことは人種差別への戦いにもいえる。

→反人種差別のジレンマ

*それでは、どのようにこれを乗り越えられるか？

・強者の論理としての「人種差別反対」

*7年前 南アフリカ ダーバン 反人種差別の国際会議

⇒ひとつのテーマとして、16世紀から19世紀までヨーロッパがおこなった奴隷貿易に対する損害賠償請求 (redress, compensation) があった。日本の場合は20年という時効や除籍という考え方があるが、奴隷貿易は人間としての最も根幹の権利を奪ったものであり、時効はないと主張。

*誰に対する損害賠償なのか？

アフリカのリーダーが欧米のリーダーに対して、過去の搾取行為に対する賠償を求めた。

*もし自分が判断をしなければならなかったら、どのようなジャッジをするか？

— 実際の補償は現実的ではないと判断しても、過ちは認めさせるという手段

— 歴史のおおもとをすべてひっくり返すような判断はできない。

⇒これまでの社会的弱者をめぐる訴訟に通じるもの

例：ネイティブ・アメリカン、アイヌの人々をめぐる訴訟

→土地を返したら、国や歴史が成立しなくなる、だから誰か弱い者に泣いてもらわないといけないという多くの判断。

アパルトヘイト

→白人の体制にはむかうものは法に反するという制度化された人種差別によって、多くの人びとが迫害をうけてきた。

*どうやって、社会に和解や修復をもたらすことができるか？

国家内の場合であれば、加害者を捕まえて、裁判で罪を確定したら処罰することでその社会は癒されると通常、考えられる。また、国同士の場合は戦争犯罪人を

とらえて殺害することで、関係修復がはかれるというのが一般的である。なぜなら、そうでなければ無限の復讐の連鎖になってしまうからである。しかし、何万人という人びとがかかわるアパルトヘイトや奴隷貿易のように、法律にしたがって合法的におこなわれていた行為を罰するためには、どうしたらよいか？全部捕まえて処罰するというのは難しい。

- ・単純ではない加害と被害の構造

- *ルワンダの大虐殺（映画「ルワンダの涙」、「ホテル・ルワンダ」）

- ⇒1994年春から初夏にかけての3ヵ月の間に民族対立がもとで、百万人近くの人びとが殺された。日本からも難民キャンプのある隣国ゴマにPKOが派遣された

- | | |
|-----|-----|
| ツチ人 | フツ人 |
| 15% | 85% |

植民地支配の時代は、ツチの人びとをエージェントにして支配がおこなわれてきた

。

国家が独立すると、選挙権がひとりひとりに与えられて、フツ族の人が大統領に。ツチの人びとは海外へ亡命し、そのなかの人々が90年代に攻め込んだ。最近ではツチの人たちが政権をとっている。

ツチもフツはひとつの文化でひとつの言葉。ただIDカードにFやTと書いてあるだけ。殺す側なのか、殺される側なのかわからなくなるという現実がある。

↓

単純ではない。罰したら関係を修復できるというわけではない。このように、人種にまつわる差別や抑圧は300年、100年といった長期的なスパンでおこなわれてきたもの。どうやって癒すことができるのかというのが考えるべき重要な課題。

4. 人種主義の根源

- ・人種という概念

- ⇒何百年にわたって作られてきた奥深い概念。

- 長い、根深い背景をもった言葉であり、簡単に社会的に作られた言葉だと片付けられない。

- ・人種の政治経済学「黒人奴隷交易はなぜ必要だったのか」

- *16~17世紀、アフリカから奴隷としてアメリカに連れていかれた人々は何をしたのか？何のために連れていかれたのか？

⇒重労働をともなう砂糖作り。

砂糖になったものはヨーロッパに送られ、紅茶やコーヒーとともに消費された。カリブの奴隷の砂糖、牧畜文化の乳、中国や中東から来た茶葉やコーヒーが結びついて富となる文化が形成された（三角貿易）。

* 18 世紀 綿花栽培

⇒作った綿花をヨーロッパに売り、産業革命によって盛んとなった綿工業にて綿製品が作られた。そして、作られた製品はヨーロッパやアジアで売られた。

その他、ゴム、ラッカセイ、パームなどがヨーロッパの産業革命を支えるために栽培され、そこで奴隷が使われた。

* 19 世紀 資本家や市民の登場

⇒カフェの普及、一般市民たちが消費するようになる

・人種の思想史「黒人奴隷交易はなぜ可能だったのか」

* フランス革命の理念（18 世紀末）

⇒自由、平等、友愛

人権宣言

同じ時期に世界史上、最悪の人身売買、奴隷貿易がおこなわれていた。

↓

パッと見たかぎりでは、人権宣言と人身売買の二つは両立しない。

では、どうやって両立させることが可能なのか？

↓

アフリカ人を人間とみなさなければ、人権を保障する必要はないという論理。

ヘーゲル、カントといったヨーロッパの偉大な哲学者たちはこのような論理に哲学的に協力し、科学的に論証しようとした。

⇒脳の容量をはかり、その小ささを根拠にアフリカ人の劣等性を証明しようとした。パリなどでおこなわれた万国博覧会で白人が見て楽しむものとして人気を評した展示のひとつが人種展示であった。

* アフリカ人は人間ではなく、劣っている。もしくは人間だが、私たちと同じではなく保護や支配を必要とする者であるという見方

↓

世界の富をヨーロッパに集中させていくための論理。

* 日本でも同じように、1903 年に大阪の現在、通天閣のある場所でおこなわれた内国博覧会では、アイヌ展示や台湾の少数民族展示、沖縄展示などがおこなわれていた

。「同じ人間じゃない」だから動物のように見てもいい。同じようにあつかわなくてもいいという発想。

⇒日本による台湾支配の時期と重なる。

5. まとめ

- ・大きな政治経済的な支配のなかで人間の区分というものが生まれてきた経緯があるということ。
- ・全学共通で一般教養としてならうような哲学者、科学者の思想が、市民社会の科学として、人種差別を正当化する論理として用いられてきたこと。
- ・ダーバンでの反人種差別会議：
世界が歴史を作ってきたうえでアフリカがいかにおとしめられ、しいたげられてきたのかを明るみに出す必要性が認識された。
- ・私たちは人種差別がさまざまなかたちで制度化された市民社会で生活しており、人種に対する意識は根深い歴史的な背景をもつ。このような状況のなかで、どうすれば人種に関するいろいろな問題点を解決する方向性を見いだせるだろうか。
どうしたら人種のジレンマを乗り越えられるだろうか。

↓

人間を白、黄、茶、赤、黒といった色や形質にもとづいたカテゴリーでわけていくことは間違っているという人種概念を否定する立場から、人種差別に反対することはできる。しかし、現実には人種差別が存在するなかで、それを解決しようと思えば、人種区分を復活させなければならないという立場もある。ただ、連帯のために一度解体した人種概念を復活させることは、また人種を再生産してしまうのではないかというジレンマに陥るのである。